

パンシル サハ セット・ピリット

—現代スリ・ランカ仏教の存在形態に関する試論—

高 橋 壯

今日スリ・ランカに伝わる仏教は、タイやビルマに於けるのと同様に、上座仏教 Theravāda Buddhism といはれるものである。上座仏教は極めて古い伝統をもつばかりでなく、パーリ語で伝承されてゐるために、史的ブッダの教説に最も近く立つものと、自他ともに許してゐるふしがある。事実、スリ・ランカの僧侶のなかには、極めて強く「純粹仏教」pure Buddhism を指向するものが少くない。

しかしながら、現実にスリ・ランカの仏教寺院を目の当りにした者ならばすぐ気がつくやうに、筆者にはいささか意外に感じたことであるが、仏教寺院 pansala のすぐ近く、あるひは多くの場合その寺院の境内のなかに、精舎 vihāra、菩提樹 Bodhi-tree、仏塔 dāgāba とともに、神祠 *devale* があるのが普通である。そしてそこには、筆者が調査対象に選定したコロombo郊外B地区の大寺院のやうに、菩提樹を囲んでいくつかの小建物があり、Viṣṇu、Īśvara、Gaṇeśvara、Nātha、Pattini、Vibhīṣaṇa、Saman や Kataragama、また Dāḍimuṇḍa や Sūniyam といったヒンドゥー教系や土着やらの様々な神々¹⁾ が祭られてゐる。しかも多くの一般仏教徒にとっては、むしろこちらの方が主たる礼拝の対象であるかと疑はれる程、繁盛してゐるのである。——以下は、筆者が昨年夏(1980, 7-9)、前田恵学教授を団長とする「スリ・ランカ仏教の存在形態」に関する現地調査に参加した経験と調査にもとづく、現代スリ・ランカ仏教の現状を分析するための理論的解明の試みである。

I. パンシルとセット・ピリット—— スリ・ランカの首都コロomboの朝は早い。リスの鋭い鳴声、どこからこんなにも沢山集ってくるのだらうかと思ふ程の烏 *kāka* の声、これが早起の子供達の歓声と入交じり、我々の眼を覚す。しかしなによりもやや離れた回教寺院の拡声器から流れるコーランの読経の音は、もはや怠眠を許してはくれない。それに比べれば、敬虔な年配の仏教徒の朝は、ずっと慎しいといへるかもしれない。

彼(女)たちの朝は、朝5時半のラジオ放送から始まる。正確には5時半少し前、

シンハラ語放送から、スリ・ランカの国歌が聞へてくる。つづいて、女性コーラスの歌ふ Jayamañgalagāthā の一節が、速い調子の国歌とは対照的に、ゆったりとそしておごそかに、「ブッダの（マーラーなどに対する）戦ひが、あなたにとっても勝利のことほぎとなりますやうに」と響びみてくる。スリ・ランカ仏教徒の一日は、このスリ・ランカの人口に最も膾炙した詩偈をもつて始まる。

時報と「アーユ・ポーワン」といふアナウンサーの言葉につづいて、今朝の導師が紹介され、いよいよ五戒とセット・ピリット **Pansil saha Set Pirit** が始まる。その次第は、次のとおりである。まづ在家信者によって、

1. Namo tassa bhagavato arahato sammāsambuddhassa

と礼拝 Namaskāraya (*Pirit Pot*, p. 1)²⁾ が3度繰返へされる。次に僧侶の読誦に合せて、在家信者が

2. Buddhaṃ saraṇaṃ gacchāmi.....dhammaṃ.....saṅghaṃ.....

と三帰依文 Saraṇāgamaṇaṃ (—, p. 1) を唱える。同様にして、

3. Pāṇātipātā veramaṇīsikkhāpadaṃ samādiyāmi.....

と在家の五戒 Pansil (—, p. 2) が唱へられる。次に、僧侶が

4. Namo tassa bhagavato arahato sammāsambuddhassa

と3度繰返して、Pansil の部分は終る。つづいて Set Pirit に入るが、以下はすべて僧侶のみが読誦する。まづ

5. Iti pi so bhagavā.....buddho bhagavā ti; svākkhāto.....veditabbo viññūhīti; suppaṭipanno bhagavato sāvakasaṅgho.....anuttaraṃ puññakkhettaṃ lokassa ti.

と三宝讃嘆 Trividharatnavandanā (—, p. 313) がなされ、次に

6. Etena saccavajjena pātu tvaṃ ratanattayaṃ

と Satya(k)kriyā が3度繰返される。次に、Mahāmañgalasutta, Ratanasutta とともに Mahāparitta を構成する

7. Karaṇīyamettasutta (—, p. 29)

が読誦される。それが終ると、

8. Etena saccavajjena sotthi te hotu sabbadā

と Saty(k)kriyā が3度繰返へされる。次に、

9. Aṭṭhaviṣi Pirit (—, p. 320~p. 321)

が読誦されて、ブッダの徳が讃ぜられる。その次に、

10. Tesam saccena silena khantimettabalena ca/

te pi tvam anurakkhantu, āroghyena sukkena cāti//

が3度繰返されて、Set Pirit はひとまず終了する。しかしその後、いはば Pirit 儀礼を終るために、いくつかの詩偈が読誦される。まづ

11. Yaṃ dunnimittam avamaṅgalaṃ ca
yo cāmanāpo sakunassa saddo/
pāpaggaḥo dussupinaṃ akantaṃ
buddhānubhāvena vināsam entu// (—, p. 321)

が3度繰返へされるが、2度目は buddha の替りに dhamma が、3度目は saṅgha が読まれるのである。

12. Dukkhaṃ pattā ca niddukkā bhayaṃ pattā ca nibbhaya/
sokaṃ pattā ca nissokaṃ hontu sabbe pi pāṇino// (—, p. 321)

のあと、

13. Āṇavum Pirt (—, p. 317)

が読まれてのち、

14. Ettāvatā ca amhehi samhatam puññasampadam/
sabbe devānumodantu sabbasampattisiddhiyā//
15. Dānaṃ dadantu saddhāya silam rakkhantu sabbadā/
bhāvanābhiratā hontu gacchantu devatāhatā//
16. Sabbe buddhā balapattā paccekānaṃ ca yaṃ balaṃ/
arahantānaṃ ca tejena rakkham bandhāmi sabbaso//
17. Ākāsaṭṭhā ca bhummaṭṭhā devanāgā mahiddhikā/
puññaṃ tam anumoditvā ciraṃ rakkhantu lokasānaṃ//

が読誦される(但し、16. と 17. は3度繰返す)。そして最後に

18. Devo vassatu kālena sassa sampatti hotu ca/
phīto bhavatu loko ca rājā bhavatu dhammiko//

が3度繰返へされ、Set Pirit は終了する。以上約20分の放送時間である。このあとドラムの音をはさんで、僧侶の説教とキリスト教牧師の説教があって、その最後にもう一度 Jayamaṅgalagāthā のメロディー(のみ)が流れて、放送は6時に終了する。Set Pirit は、人々の平安を祈願して行はれるのであるが、それはピリット儀礼のエッセンスを示すもので、簡単ではあるが、頻繁に行はれるが故に、重要な儀礼である。

II. スリ・ランカ仏教の二重構造——冒頭に言及したやうに、現代スリ・

ランカの上座仏教 Theravāda Buddhism は、そのみが単独で存在するのではなく、ヒンドゥー教や土着の信仰に由来する非仏教的要素の民間信仰 popular religion とが一見混然一体となつてゐる。その意味ではアジア宗教の特徴とされる「宗教の二重構造」³⁾の現象が、ハッキリと顕在してゐるといへるであらう。従つて現代スリ・ランカの仏教研究の重要課題の一つは、この二重構造をどのやうに理論的に解明するかといふところにある。そのためには、上座仏教と民間信仰とを区別したうえで、この両者のからみ合ひを検討することが、問題の正しい解明への道となるであらう。

III. 「大伝統と小伝統」理論による分析—— さて、仏教と民間信仰の関連といふ問題を、仏教学者が殆んど無視してきたといふのは、少し誇張にすぎるとしても⁴⁾、確かに正面からこの問題に取り組んだ業績⁵⁾の少いことは事実である。これに対して、スリ・ランカの宗教を体系として理解しようとしたのは、人類学者や社会学者であつて、この点は積極的に評価しなければならない。彼らの業績のうち、

G. Obeyesekere: *The Great Tradition and the Little Tradition in the Perspective of Sinhalese Buddhism* (1963)

.....: *The Buddhist Pantheon in Ceylon and its Extensions* (1968)

M. Ames: *Magical Animism and Buddhism— A Structural Analysis of the Sinhalese Religious System* (1964)

R. Gombrich: *Precept and Practice— Traditional Buddhism in the Rural Highlands of Ceylon* (1971)

などは、研究者自身のフィールド・ワークをふまえた現代スリ・ランカ仏教に対する人類学的研究を代表するものとみなされてゐる。詳細な紹介は他処にゆづつて、本稿では、G. Obeyesekere と M. Ames の研究の結論だけを紹介し、批判しよう。なぜなら、両者はともに共通する理論的道具立を使って、スリ・ランカの宗教を分析してみながら、結果的には異つた認識に到達したのであるから、両者の比較検討によって、結論の適否ばかりか理論の妥当性を吟味することにもなるであらう。

G. Obeyesekere は、人類学者 Redfield の理論 Great and Little Tradition⁶⁾ を武器に、スリ・ランカ中央部、かつてのキャンディー王国の封建制の影響が濃厚な Matale 近郊の、やや孤立した農村社会における仏教のあり方、特に神々の体系 pantheon を中心に論じてゐる。といふのは、農民が神々に捧げる供物の純性

度のうちに、神々の相互の位置関係が反映してあるからである。すなはち、供物の最も純性なのは、ブッダに献げられ、その下には守護神たち、地域の神々、demon、そして最後に spirit といふ具合に、神々の体系はピラミッド形のヒエラルキーを構成してゐるのである。このピラミッドの頂点に位置するブッダに対応するのが、広く東南アジア諸国に共通する僧侶のための仏教、つまり上座仏教であり、それ以下は、タイやビルマのとは異質のスリ・ランカに独自のものといふ意味で、Sinhalese Buddhism つまりスリ・ランカの一般大衆の仏教とよばれてゐる。そして前者が大伝統で、後者が小伝統に相当する。しかし二つの伝統は虚空 vacuum に存在するのではない。両者は共通の“salvation idiom”によって結ばれてゐる。Sinhalese Buddhism の内部では、この“salvation idiom”は出世間的 (lokottara) 目標に関連し、体系の残りの部分は世間的 (laukika) 目標に関連してゐるから、従つてこの基準からみれば Sinhalese Buddhism の内にも、さらに二つの区別が設定される、といふのである。

一方 Ames は、南西海岸の Matara を調査地とするだけに、呪術的アニミズムが大きな比重を占めてゐる。それ故に、スリ・ランカ人の宗教の最も基本的境界線は、仏教と呪術的アニミズムの区別であり、それは人々の宗教的目標が、出世間的であるか、世間的であるかの区分にもとづくといふ。大伝統と小伝統の分割は、ただ仏教のうちのみ修行 bhāvanaya と福作徳 pinkama の区別として2次的に設定されるにすぎず、そのうちの後者つまり民衆の仏教は、決して呪術的アニミズムと混同されるべきものではないと主張する。

方法論的にいへば、Obeyesekere が「大伝統と小伝統」理論を第一の基準とし、次に出世間と世間の機能分割を第二の基準としてゐるのに対して、Ames は、後者を第一の基準に、前者を第二の基準とするところに、両者の見解の分岐点があるのである。

ところで、Obeyesekere は小伝統のうちに、出世間を志向する仏教をその他の民間信仰とともに一括するのであるが、Kapuism や Grahism はあきらかに仏教とは伝統を異にするものであるから、この説には無理がある。また Ames は大伝統と小伝統の外に、呪術的アニミズムをみるのであるから、伝統は三つあることにならう。だが仏教のうちに二つの伝統を設定するのは、困難である。

しかしながら、我々が両者のピラミッドを重ね合せてみれば、興味深い事実を発見する。それは、Obeyesekere のいふ小伝統としての仏教と、Ames のいふ仏教としての小伝統であつて、具体的には同じ事柄を指しながら、一方は上座仏教

にあらざるものとみなし、他方は上座仏教と考へるのである。実に、問題はここにあるといはなければならない。要するに、両者が見解を異にする「上座仏教にして上座仏教にあらざる」仏教の正体はなにか、といふことに他ならない。(つづく)

- 1) H. Bechert, *Mythologie der Singhalesischen Volksreligion*, Stuttgart 1976.
....., *On the Popular Religion of the Sinhalese*, Göttingen 1978.
- 2) *Maha Pirit Pota*, ed. Devundara Śrī Vācissara, Colombo
Piyadassi Thera, *The Book of Protection: Paritta*, Colombo 1975
奈良康明「パリッタ呪の構造と機能」(宗教研究 213)
片山一良「パリッタ儀礼—スリランカの事例—」(駒沢大学「宗教学論集」第九輯)
- 3) 大塚久雄, 『社会科学の方法』 p. 134 以下。
- 4) É. Lamotte, *Histoire du Bouddhisme Indien*, p. 71 et p. 686.
- 5) J. Masson, *La religion populaire dans le canon bouddhique pâli*, Louvain 1942.
- 6) R. Redfield, *Pesant Society and Culture*, p. 41.

(名城大学助教授)

NEW PUBLICATION

THE SPHOṬA
THEORY OF LANGUAGE

A Philosophical Analysis

HAROLD G. COWARD

MOTILAL BANARSIDASS

Delhi 1980 (xx+158 p.)